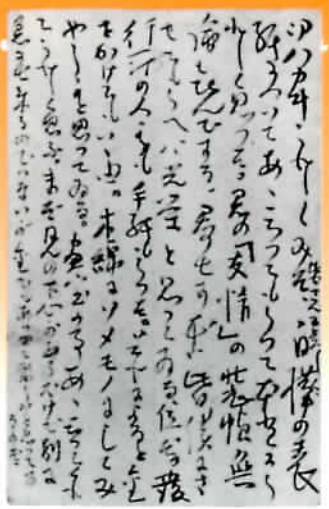


岸田劉生から武者小路実篤に宛てた葉書（大正9年1月14日）
画家の岸田劉生と実篤も親友同士。実篤をとても尊敬していた岸田は、「友情」の装幀をたのまれて、「無論喜んでする」と書いている。

冬瓜と南瓜　昭和36年
絵に添えられた言葉には、自分も他人もお互いを大切にして、しかも親しいという、人間同士の理想的な関係が表されている。

三 自然の意志

大宮は、野島の真剣な姿を見て、その恋が実ることを願い、心からの助言を惜しみません。杉子が親友野島の妻となる人として、申し分ない女性であると思っていました。

ところで、作者実篤は、この世には人間の知恵がはるかに及ばない所で、大きな自然の意志というようなものが働いていると考えていました。この自然の意志というものは、時に人間に対して残酷とも思われる程の打撃を与えることがあるものです。

また、実篤は人は自分の本心に正直であってこそ、他人の心と深く結びあうことが出来ると信じていました。そして人は、自分に正直であろうとする心と、他人を傷つけまいとする気持ちがぶつかりあい、激しい苦しみを味わうことがあるのでした。

状況は、野島も大宮も、共に予想もしなかった方向へと進んでゆきました。

四 立ち上がる勇者

小説「友情」は、上篇と下篇の二つの部分で構成されています。上篇は野島の杉子に対する清純な思慕の情が高まって行く様子を描き、下篇は大宮が杉子と交わし合った数々の手紙で綴った小説という体裁を取っています。大宮はこの小説を野島に示すことで、自分が親友を裏切らざるを得なくなった苦悩を誠意をもって訴えたのでした。

いよいよ、「友情」の最も感動的な終末の場面を迎えます。大宮の小説から、あまりにもみじめな自分の立場を知って、一時は狂わんばかりに振る舞う野島ですが、やがて、大宮に手紙を書きます。

そこには恨みごとなど全くありません。互いに別の道を歩んでも、いつかは、たどり着いた山上で握手する日があることを望む、と述べています。

そして、この苦難を神が与えてくれたものと感じ、どんなに打ちのめされようとも、再び立ち上がって前進するという、気迫あふれる勇者の決意が記されていました。

五 「友情」が世に出た頃

「友情」は、大正八年十月半ばから約二ケ月、大阪毎日新聞に連載されました。実篤は、前年十一月、宮崎県に〝新しき村〟を開いたばかりで、農耕その他で忙しい日々を送っていましたが、この年、「幸福者」「耶蘇」等の力作を次々と執筆。名作「友情」をも発表したのでした。

新しき村で　大正8年頃　中央が実篤
実篤は、誰もが平等で自分の個性を生かせる社会を実現しようと、大正7年11月、宮崎県に新しき村を創設。自らも会員とともに農作業を行った。

発行日／平成14年7月27日初版　平成17年7月23日再版　発行／調布市武者小路実篤記念館　〒182-0003 東京都調布市若葉町1-8-30　TEL.03-3326-0648
企画・編集／調布市武者小路実篤記念館運営事業団　資料撮影／川崎 茂　レイアウト／デザイン室 あとりえ
本紙配合率40%に再生紙を使用しています

もっと知りたい 武者小路実篤

小説①「友情」

34歳の実篤が「友情」を書いたのは、もう80年も昔のことです。けれども、この作品は「坊っちゃん」（夏目漱石）、「伊豆の踊り子」（川端康成）などと共に今なお広く読み継がれ、近代日本が生んだ青春文学の最高傑作の一つと言われています。

今、一度だけの人生を悔いなく生きようと願うあなたに、小説「友情」は力強い心の糧となることでしょう。

一 よき友・野島と大宮

「友情」の主人公は二十歳を少し過ぎた野島という青年。劇作家を志す素朴で誠実な、また、一途なところのある若者です。彼には、大宮という親友がいます。すでに小説家として世に知られはじめている人物でした。二人はお互いに相手の人柄や才能を認め合っていました。野島は、少し年上で考え深く心情豊かな大宮から学ぶことが多く、よき友に恵まれたことを感謝しています。大宮も野島の人物を深く理解し、真の友情をもっていました。

この物語の作者である実篤にも、学習院の中等科以来の友人、志賀直哉がいました。

「友情」初版本（大正9年　以文社）
装幀は岸田劉生。

実篤と志賀直哉との間には、「友情」に描かれたような事件はありませんでしたが、大宮という人物には、志賀直哉のイメージが反映していると言われています。二人は心の底からわかりあい、競い合い磨きあった生涯かけての友でした。

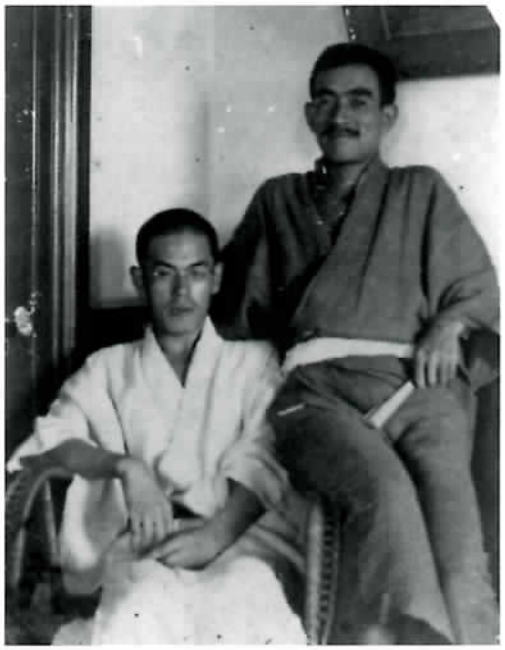
人間は、若い時に、うわべだけの友達ではなく、心からの親友を持つことが、とても大切です。

二 野島青年の夢

ある時野島は、友人の妹で、杉子という十六歳の少女にめぐりあいます。そして、彼女の明るい美しさ、かしこさに、たちまち心を奪われました。そのすぐれた人柄を知るにつれて、野島の清純で、しかも一方的な愛は高まって行きました。

大宮は、『恋愛』について次のような考えを語って、そんな野島を励ます。〝恋することは相手の幸福を願うことにつながり、その成就のために自分が尽くすことだ。そうした『恋愛』の上に築かれた『家庭』こそ、自然の意志にかなった美しいものなのだ。〟

野島はやがて、未来の杉子との幸福な家庭さえも思い描くようになって行きます。



左、武者小路実篤、右、志賀直哉。
「白樺」創刊の頃（明治43年頃）　個人蔵